

而今の生

—四つの命—

大塚 稔

Living in the Present Moment

Minoru OTSUKA

「さあ、お前は年をとった。死が迫ってきたのだよ」

と神はおっしゃいます。

「これからはお前の本当の顔をまじまじと見る時がきたのだ」

「なんのためですか」

「それが、お前が私のところに持ってくるお前自身だからだ」

「では友人や家族の眼に映っている私の顔は？」

「あれはお前が地上に残していくお前のかたみのようなものだ。しかしかたみは思い出の種になってもお前そのものではない。」

『死について考える』遠藤周作 光文社文庫145頁

「代々甲冑かっちゆうの家に生まれながら、武林を離れ、三槐九卿さんかいきゆうけいにつかへ、咫尺しせきし奉りて寸爵なく、市井に漂て商買しらず、隠に似て隠にあらず、賢に似て賢ならず、ものしりに似て何もしらず、世のまがいもの、からの大和の教ある道々、技能、雑芸、滑稽の類まで、しらぬ事なげに、口にまかせ、筆とうわくにはしらせ、一生を囀りちらし、今はの際にいふべく、おもふべき真の一大事は、一字半言もなき倒惑とうわく、こころに心の恥をおほひて、七十あまりの光陰、おもへばおぼつかなき我世経畢わがよへおわんぬ」(註1)。

近松門左衛門辞世の贅拔粹

序：コレデオシマイ

『修証義』には、「生を明らめ、死を明らむるは、仏家一大事の因縁なり」とある。仏道修行するものにとって、生の真実を明らめ、死の真実を明らめることは、何より肝要なことだという意味であろう。もっとも生死の問題というのは、何も仏道修行するものだけが明らめねばならない事柄でもない。人間として、とりわけ理性と感性を持った人間として、この世に生を受けた者なら、誰しもが否応なく思い悩み、その解決を迫られる問題でもある。この生死の問題の解決こそが、最終的に目指されるべき事柄であると言っても過言ではないが、多くの人々は、結局、余命宣告を受けてから、うろたえながらこの解決を無理やり強いられることになる。

還暦を待たずに幽明境を異にした著名人は多い。滝廉太郎24歳、吉田松陰29歳、小林多喜二29歳、中原中也30歳、高山樗牛31歳、富永仲基31歳、織田作之助34歳、モーツァルト35歳、長塚節35歳、正岡子規35歳、有島武郎35歳、芥川龍之介35歳、尾崎紅葉36歳、ゴッホ37歳、宮沢賢治37歳、太宰治39歳、パスカル39歳、国定忠治40歳、幸徳秋水40歳、中江藤樹40歳、高橋和巳40歳、尾崎放哉41歳、森有礼42歳、モーパッサン43歳、若山牧水43歳、尾崎秀実43歳、有島武郎45歳、三島由紀夫45歳、スピノザ45歳、寺山修二48歳、三木清48歳、夏目漱石49歳、坂口安吾49歳、山下清49歳、竹久夢二50歳、松尾芭蕉50歳、岡倉天心51歳、ナポレオン52歳、野口英世52歳、諸葛孔明53歳、チャイコフスキー53歳、道元53歳、九鬼周造53歳、中江兆民54歳、デカルト54歳、最澄55歳、萩原朔太郎56歳、ヒトラー56歳、ニーチェ56歳、王陽明56歳、ダンテ56歳、ウェーバー56歳、寺田寅彦57歳、ベートーベン57歳、北原白秋57歳、高見順58歳、種田山頭火58歳、杜甫58歳、モンテーニュ59歳、スタンダール59歳、石田梅岩59歳、明恵59歳。枚挙に暇がない。

私には、それほど知人や友人がいるわけではない。しかしその微々たる友人や知人が、ここ数年の間に次々と還暦を待たずに亡くなっている。人生の寂寥を感じるにはいくらか早い気がするが、57歳という年齢は、一面では、もう猶予を許さない年齢であるような気もする。兼好ではないが、「死期はついでを待たない」。

数年前に久しぶりに再開できたある友人は、昨年、55歳でひとりトイレで頓死した。死後、三日が経過していた。死体は検死に付された。死因は心筋梗塞であった。孤独のなかの壮絶な死であったろうか。電話のたびに「いつ死ぬか分からない」というのが彼の口癖だった。最後の電話は今年の5月。その時も同じようにその口癖を言っていた声忘れられない。義兄も、結婚することなく、前日まで比較的平静に過ごして、翌朝、誰にも気づかれることなく静かに亡くなっていた。心に闇を背負った54歳での他界であった。何くれとなく面倒を見てもらっていた出版者の編集人も、年は定かではないが、五十歳を少し過ぎた年齢で亡くなられたように感じられた。彼からの最後の電話は、出版した書物の買い取り依頼であった。しかし送られてきた封書には振込用紙がなく、逆に催促して送ってもらった。人柄が滲み出た顛末であった。しかし結局は、僅か10部ほど買い取ったきりだった。悔やんでも悔やみきれない。50歳代というのは、平均寿命からすれば、世間ではまだまだ働き盛りの年齢である。にもかかわらず、死は背後に静かに控えて、容赦なく唐突に彼らを奪い去った。平均寿命という根拠のない亡霊に誤魔化されて、人々は知らず知らずのうちに、死を80歳程度におき定めて、とりあえずは忘却の彼方に追いやって過ごしている。

神沢杜口（1710－1795）のように、「辞世とはすなわちこれ迷い、ただ死なん」と啖呵を切ってみたいが、この杜口ですら、「ただ死なん」と言葉を残さずにはおれなかった。85歳まで生きても、何か言わねば気が済まない。露と消え行く人間の業だろうか。小林秀雄ですら、死にたくない、死にたくないと言って世を去った。「聞きたがる、死にともながる、淋しがる、心は曲がる、欲ふかくなる」と詠った仙崖和尚も、同じように死にたくないと言いながら遷化した。遠藤周作は、信仰を持ったことで逆に臆することなく泣きわめきながら死ぬることを喜びとした。見舞いに来た友が去った後、妻の前で、「なぜ彼らより私が先に死なねばならないのだ」と号泣したと言う。小林一茶は、病床では、「美しや障子の穴の天の川」と繊細な俳句を残しているが、辞世の句は、「盥から盥へうつるちんぷんかん」と、この世の理不尽と現実をユーモアを装って、はき捨てるように詠っている。また在原業平は、「ついでに行く道とはかねてききしかど、きのうきょうとはおもわがりし

を」と詠った。狂歌の逸材、蜀山人は、「今までは他人が死ぬとは思ひしが俺が死ぬとはこれあたまらん」とおどけて見せた。正面から見ても斜めから見ても、どうにも納得できないのが突然の死なのかもしれない。勝海舟のように「コレデオシマイ」と最後に言えるほど余裕はない。腹をくくりながらも、愚痴を言わねば済まない。

I：素手で生きる一岸本英夫の場合

若さは寿命を保証しない。この当たり前のことがどうにも実感できない。誰しも、人より自分が先に行くとは考えない。親よりも早く亡くなるとは思ひもしない。ごく当然に親よりは長生きするものと勝手にたかを括っている。そのような自分に、ある日突然、死が迫った現実となる。その時になってにわかに沸き起こるのが、生に対する猛烈な執着心だと言う。この生に対する執着心を生命飢餓状態と呼んだのは、宗教学者の岸本英夫（1964年1月25日死去。61歳）であった。彼は遺稿となった「我が生死観」（『死を見つめる心』所収）において、突如沸き起こるその生命に対する執着心を、生命飢餓状態と呼んだ。それは、次のような鬼気迫る表現で紡ぎ出されている。

「死が目の前に迫り、もはやまったく絶望という意識が心を占有したときに、にわかに、心は生命飢餓状態になる。そして生命に対する執着、死にたいする恐怖が、筆舌を超えたすさまじさで、心の中に起こってくる」。 (12頁)

「死の恐怖は、人間の生理的心理的構造のあらゆる場所に、細胞の一つ一つにまで、しみわたる。生命に対する執着は、藁の一筋にさえすがって、それによって迫ってくる死に抵抗しようとする」。 (14頁)

あの世を信じることは、知性の妥協でしかないと思える岸本にとっては、どうしても靈魂不滅や天国を信じるわけにはいかなかった。彼の理性がそれを許さなかった。彼は、そのような立場を取ることを、「素手のままで死の前に立っていた」と表現した。合理的であることが知識人の一つの態度なのだとすれば、彼は、その苦悩を正面から潔く背負い込んだことになる。彼が逝去したのもようやく還暦を一つ過ぎた年齢でしかなかった。10年に及ぶ闘病生活であった。

岸本によれば、生死観は二様に語れると言われる。一つは、生死観を自分の問題としてではなく、一般論として語る場合である。それは、人間一般の生死を論じるという点で、観念的な生死観だと断罪される。私が今現にこうして書いているような生死観である。しかしもう一つの生死観として、自分が切羽詰って、どうしても語りださざるをえない生死観がある。これが、生命飢餓状態に置かれた生死観である。彼はこれを、

「腹の底から突き上げてくるような生命に対する執着や、心臓をまで凍らせてしまうかと思われる死の脅威におびやかされて、いても立ってもいられない状態におかれた場合の生死観である。ギリギリの死の巖頭にたつて、必死でつかもうとする自分の生死観である」。

と表現した。この生死観には、「人間が健康で生命に対する自信にみちて、平安に日々の生活を営んでいる場合には、まったく思いもかけない要素」が付け加わると言う。それが、本能的とも言える「生命欲であって、生理心理的な力」である。日ごろは隠れて余り意識しないこの力の激しさを、彼は、先に挙げたように、「生命飢餓状態」と呼んだ。この状態があればこそ、生きたいという切なる願いと死ななければならないという現実とが、鋭く対立した挙句に、当事者が必死になって紡ぎ出す切羽詰った生死観が生まれる。

生命飢餓状態に陥った彼は、まず、死にたいする恐怖に、異質な二つのものがあることに気づく。一つは、死にいたる肉体の苦痛であり、もう一つは、生命が断ち切られるということ、つまり死そのものにたいする恐れである。これはほぼ同時に襲ってくるが、やはりしっかりと分けねばならないと言う。そして分けた上で、本当に恐ろしいのは、死にいたる苦痛ではなく、命を絶たれることに対する恐怖なのだと言断する。これに比べれば、肉体の苦痛など取るに足りないとすら述べている。そして彼は、この命を絶たれる死の恐怖は、煎じ詰めると、死によって、「この自分」という意識がなくなってしまう恐怖だと言う。

「この、今、意識している自分が消滅することを意味するのだと気づいた時に、人間は、愕然とする。これは恐ろしい。何より恐ろしいことである。身の毛もよだつほどおそろしい」。(上掲書17頁)

このような恐怖心から、人は、自己としての意識だけは永遠に残しておきたくなる。これが近代的来世観であるが、彼は、死後の生はおろか、そのような自己意識の存在すら認めない。死は、肉体と同時に意識をも消滅させる。死後の存続を信じなければ、死とは自分が無になることに尽きてしまう。当然の理屈のようだが、敬虔なクリスチアンの家庭に育った宗教学者岸本には、それは、ある意味、矛盾に満ちた必死の決断であったろう。

「私は、奇跡を行うことのできるような伝統的な人格神信仰は、どうしても信じることができなくなった。その意味で、神を捨てたのである。そして同時に死後の理想世界としての天国や浄土の存在は、まったく信じないようになった。そして、しだいに私は肉体の死によって、私という意識する個体は、物質的にも、精神的にも、解消するものと考えようになってきている」。(18頁)

人格神を否定し、神の存在を否定し、死後の生をも否定した岸本は、結局、永遠の命を得る手段を失った。信仰心もなく、かと言って精神の動揺を抑える理屈も考え付かないままに、死に立ち向かうことになった。彼は、これを「素手でのままで死の前に立っていた」と形容した。しかし永遠の命を信じないことが、素手のままで死に面することだとすれば、このような状況は、岸本に特有なものでもない。むしろ宗教学者が、そのような状況で素手のままであったことこそ、自己矛盾を孕んだ異質なことであったと言わねばならない。通常は、このような立場こそ、特に近代日本人には典型的な立場でもあったのだが。それはさておき、彼は、一体、どのような理屈で、精神の動揺を鎮めたのだろうか。生命飢餓状態は、それによって果たして癒されたのだろうか。

死後の生を信じる者にとっては、死後の世界は、暗闇ではなく一つの実体であった。それを信じ

ればこそ、安心してこの世から去ることができた。しかし彼には、それができない。そうして結論づけたことがらが、

「死というものは、実体ではないということである。死を実体と考えるのは人間の錯覚である。死というものは、そのものが実体ではなく、実体である生命がない場所であるというだけのことである。＜中略＞生と死とは、ちょうど、光と闇との関係にある。物理的な自然現象としての暗闇というのは、それ自体が存在するのではない。光がないというだけのことである。光のない場所を暗闇という。人間にとって光にもひとしいものは、生命である。その生命のないところを、人間は暗闇として感じるのである」。(21頁)

という考え方である。死の暗闇は実体ではないとするこの考え方は、岸本には、大発見であった。なぜなら、これは、生と死を二分する通常の考え方から、ただ生命だけを肯定する考え方の発見であって、同時にそれは、「生命の絶対的な肯定論者」になることでもあったからである。死というのは別の実体であって、これが生命におきかわるのではない。ただ単に、実体である生命がなくなるというだけのことである。彼は、これによって虚ろな死の存在を否定して、生だけを完全燃焼させることができると考えた。死は実体ではない。死は無である。無は考えられる対象ではない。対象として考えられない無を考えようとするのは、愚かである。その無を恐れて、実体である生を軽んじるようなことはあってはならない。

「いかに病に冒されて、生命の終わりに近づいても、人間にとっては、その生命の一日一日の重要性はかわるものではない。つらくても、苦しくても、与えられた生命を最後までよく生きてゆくよりほか、人間にとって生きるべき生き方はない」。(23頁)

これは、彼には、ギリギリの限界状況まで来て、思考を一転させる大回転と映った。この生を一期一会として絶対肯定する考え方である。死を前にして大いに生きる。彼は、これを新たな出発点とした。その後は、ただひたすら仕事に没頭するようになる。そうした中で、彼は、「別れのとき」という想いに遭遇する。彼は、先の遺稿の数ヶ月前に書かれた「別れのとき」という論文には、それを次のように表現している。

「別れ、それは、常に、深い別離の悲しみを伴っている。しかし、いよいよ別れのときがきて、心を決めて思い切って別れると、何かしら、ホッとした気持ちになることすらある。人生の、折に触れての、別れというのは、人間にとっては、そのようなものである。人間は、それに耐えていけるのである。死というのは、このような別れの、大仕掛けの、徹底したものではないか」。 (30頁)

そして「わが生死観」では、

「私は、生命をよく生きるという立場から、死は、生命に対する別れのときと考えるようになった。立派に最後の別れができるように、平生から、心の準備を怠らないように努めるのである」(23

頁)

と述べた。別れは、人間関係を超越して、広く生に対する別れに、生きることは、生命を生きることに、それぞれ昇華されたかに見える。別れには、準備が必要である。その準備を必死ですること。而今に生きるとは、そのことである。死を別れのときと見ることは、生を生き切ること、死は実体ではないとすること、であった。極限状況に置かれた人間の端的な思いが語られてあまりあるが、不思議にも、この遺稿の最後は、以下のような言葉で終わっている。

「いかにしてよく生きてゆくか、いかにして、別れのときである死に処するか、このような問題を全て後に残して、しばらく筆をおく」(23頁)

と。強弁する自分の論理に、心底では納得ができなかったのだろうか。彼は、結局、その最終的な解決を放棄して筆をおかざるをえなかった。

II：慟哭の中で—高見順の場合—

比較的平静さを装った思想家の場合とは異なって、作家の場合は、直接感情が吐露される。食道ガンで4度の手術に耐えた高見順（闘病中に先の岸本の死を知ることになる）の『高見順 闘病日記上下』をもとに、彼の生死観を見てみよう。高見順のこの日記には、1963年10月5日から死の一ヶ月前の1965年7月13日までのものが収められている。10月6日の日記には、

「死を思うべきか。生を一たすかるかもしれんと思うべきか、ガンは常識としてたすからない。だからかえって、僥倖を思う」。(上5頁)

確定した死を前にして、奇跡を願うこと、それが僥倖。つまり不思議な力で、何とかこの命を救ってもらうことはできないかと一心に奇跡を待つ心だろうか。余命宣告を受けた誰しもが思い抱くことであろう。その後、日記は、手術を前に、

「手術前夜なり。死んでたまるか」。(8頁)

と綴られる。術後は、その苦しみの中、

「吉川英治。努力の一生。その結果ガン。苦しみの死」(12頁)

と書き捨てた。前年の1962年9月7日、肺がんでなくなった吉川英治を忍んで、努力の甲斐もなく、苦しみのうちに死んでしまったと呟く。この後は、日記の随所に、だれそれが死んだという文言が散りばめられるようになる。余命宣告を受けた人間には、死亡欄を見て自分よりも若くして亡くなった者があれば、それが言い知れぬ慰安となると言われる。人は、残酷なことに、上を見て癒される

ことは少ない。

「人はなぜ死をおそれるのか。死ぬのをいやがるのか。そんなに生が楽しいのか。生きていることがいいことなのか。苦しみに満ちた生なのに。わたしもなぜ、死を恐れねばならぬのか」。(47—8頁)

マルクス運動に参画し、「転向」を強いられはしたものの、無神論者を標榜していた作家らしく、彼もまた、「しかし私は、死後を信じない」と言い切る。「非理性的な信仰も不可能なら、いわば理性的な帰依も私には不可能だ」という。盲目の信仰には頼れず、合理的な信仰にも頼れない。

「死と直面しつつ、救いは遂に私にはありえないのか」。(251頁)

悲壮な苦悶の中に、彼は、親鸞、道元、聖書などを読み漁る。「夜ひそかに慟哭」しながらも、読書は続けられる。しかし「考えることで救われるか」とも思いつつなされるこの種の読書は、悠揚迫らぬ読書というよりは、生死観をどうにか定めようとする不安に怯えた「おろおろした心」が、行き場を失って読書へと駆り立てる体のものであった。

「死ぬときは死ぬがよろしく候。これ苦難を逃るる妙法にて候」(256頁)

という良寛の言葉やエピクロスの

「実は、死は、われわれにとってはなにものでもない。なぜならわれわれの存するかぎり死は現に存在せず、死が現に存在するときは、もはやわれわれが存在しないからである」(257頁)

という言葉に、痛快さを感じてはみたものの、同年12月22日の日記には、

「それはそのときだけのことである。そんなに簡単に始末できるものではない。第一そんなに簡単に始末できるものだったら、死の恐怖に誰も悩まされはしないだろう」(299—300頁)

と、綴っている。結局、

「人が誰だって死なねばならぬのだ。私だけではないのだ。そう思っても、心を慰めることはできぬ。なぜ私が他の人たちよりも早く死なねばならぬのだ。そう思って、いやな気がする」。(299頁)

この本音が、絶えず頭をもたげては、彼を苦しめる。しかしある時、ガン歴15年のおじいさんが、付き添いもなく、キッチンでひとりで毎日とろろをつくっては食べていた。好きだから食べているのではなく、ただとろろが身体にいいからそれを食べ続ける。その姿に、彼は、生きることの強い

意欲を感じた。生命ある以上は、生命を大切にしなければならない。この単純な事実思い至ったときに、次のような一文が記される。

「私は、ふと、こんなことを思った。極楽往生とは死んで極楽に行くことではなく、この世に生きているうちに、すでに極楽往生がある。そういうこの世の極楽往生とは、いつ死んでもいいと、この生を放擲しているのではなく、逆に生きている間は、一所懸命生きる。阿弥陀如来から招かれるまでは、この生を大切に生きて生きる。いつ死んでもいいと生を投げることではない。むしろこの生を、人よりもっと強く深く充実させて生きる、それがこの世での極楽往生ではないか」。(311頁)

そして、

「死に対する覚悟とは、いつ死んでも平気だという覚悟というほかに、だから生を投げるというのではなく、むしろ生きられるだけは、生きている間は、生を充実させようという覚悟なのではないか。一見死の覚悟とは矛盾しているような、一見生への執着のような、死ねる覚悟のできていない執着のようにも見える。生の尊重、それが、すなわち、死に対する覚悟というものではないか」。(312頁)

これで漸く、自分なりの収めどころを掴んだのだろうか。その後の日記は、比較的落ち着いたものになっている。次に出てくる言葉は、「いさぎよさ」である。彼は、いさぎよさを誇りのために持とうとする。

「ガンに対して何も、いさぎよさもクソもあったものではない。そうも思えるが、相手が理不尽なガンだとしても、こっちは人間として、臆病な卑怯な取り乱し方はしたくない。人間の誇りをもって、いさぎよさをたっとびたい。ひとのためでなく、自分のためだ。見栄や虚栄心や、名を重んじるといったことからではなく、ひとりで死ぬ私としても、自分ひとりの人間としての誇りとして、いさぎよくありたい。けっきょく、その方が苦しみからすこしでも免れられるのではないか。死ぬのはいやだ。何でこのオレが、こんなガンになって死なねばならぬのだと、泣き喚きもだえ苦しんでも、それで苦しみが軽減されるわけのものではない・・・。覚悟を決め、そして肉体の苦痛にはすなおに身をゆだねて、いさぎよく死ぬ方が苦しみがずっと軽くてすむにちがいない」。(367頁)

と、きっぱりしたことを記した。しかしこの後に、すぐにそっと、「これは想像しているだけのことだが」と不安感を覗かせている。まだまだ決着が付かずに、煩惱に噛まれていると自ら反省することを忘れない。徹底した自己反省と自己凝視とが、本当の意味でのいさぎよさを生む。彼にとって、その見本は親鸞であった。

「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになし」

(368頁)

こうして39年の日記は、

「昭和39年よ、さようなら。今年一年、こうして生きることができた！」(378頁)

と括られた。

しかし昭和40年の日記(『高見順 闘病日記下』)には、もはや「いさぎよさ」という言葉はほとんど見当たらなくなる。彼は、最後まで、心の平和を求めながら、手を合わせるができなかった。いさぎよさもすでに忘却の彼方に消え去ってしまった。国木田独歩は、死の間際に、師である植村正久に救いを求めた。植村は、「ただ祈れ」と言った。独歩は、「祈れません」と応えた。死に瀕した正宗白鳥は、懐疑と信仰の狭間で苦しみつ、最後には懐疑的な知性を振り捨てて、「アーメン」と言った。バイブルは凡書ではなかった。舟橋聖一は、白鳥が脳軟化症になったためにそう言っただけだとむごいことを述べているが、いずれにせよ、高見は、白鳥にはなれなかった。

日ごとに執拗に繰り返される痛みが、無意味な痛みであることに耐えられなくなって、彼は、生を次のように見てみようとする。

「ありうべからざるものが泡のように偶然、ぽっかりと生まれたもの。それが生なのではないか。死ぬときには苦しまねばならぬ—あれは、ありうべからざるものの消失の当然受けねばならぬ刑罰のごときものではないか」。(下111頁)

苦痛に満ちた生に、自分なりの解釈を見出そうとするが、それも束の間、

「この痛み。実にやりきれぬ。たえきれない。限度があるぞと、大声で叫びたい」。(193頁)

「癌の場合、体力の回復は、次の転移のとき手術ができるようにという準備で、直るということと必ずしも結びついた療養ではない。死への一步一步」。(219頁)

こうして、彼もまた結局は、

「昨日のために人は生きるのではない。おなじく明日のために生きるのではない。たとえベッドにしばられた生活とはいえ、生きるとは今日を生きることだ」(221頁)

と、言わざるを得なくなる。彼にとって今日を生きるとは、日記が書けること、オウムのおしゃべりができることであった。しかし彼の苦悩は更に深まり、彼の知性は、厳然とした事実をありのままに受け入れざるを得ないのだという認識に至りつく。

「絶体絶命の場所には、もはやヒューマニズムはない。もはや？病気には(運命には)そもそもヒュー

マニズムなんでもものはないのだ。残酷もなにもそこにはないのだ……。なまじヒューマニズムなんてことが心にあるものだから、残酷だなんだとグチをこぼす。醜体である。動物の堂々たる死をおもえ。死を残酷だなんてこぼすか。黙って宿命にしたがっている」。(239-240頁)

「親鸞について読み、考え、無量寿経を読み、考え、キリストについて読み考えたこと、あれはどうなったのか。なんの痕跡も心に残していない気がする。なんということだろう」。(244頁)

理屈はどうあれ、「いやだ」という思いが拭いきれない。軽薄なヒューマニズムを否定して、宿命をただ受け入れることを自分に言い聞かせつつも、とうとう彼は、ヨブのように神を呪い出す。

「私の魂は、いまちぢに乱れている。ヒューマニズムなんてウソだ。善意なんてウソだ、生きる喜びなんてウソだ。死を前にしたとき、こんなもの一切は無意味だ。おもいきり？神の言葉をはきたい。神の前にあのような敬虔にひれ伏したシュザンヌを3年間ガンで苦しめ、結局殺した神。神は、造物主は、人間の死を、生きものの死を、もうすこし、なんとかできないものだろうか。死ぬことはいい。生きものは死なねばならない。死そのものを残酷だというのではないが、もうすこしなんとかちがった死を与えることができなかったものか。あまりにもむごい。むごたらしい。死をおもうと、生きる喜びなどで口にするのは、ちゃんちゃらおかしい。善意とかヒューマニズムなんて口にするのは、やめたがいい。残酷な死の現存のまえには、善意もクソもあったものではない。せいぜい憎ったらしく生き、目に見えるものだけを信じて、ぼかっと死んだほうがマシだ。誰の前にも来る死は、その残酷さにおいて、おなじなのだ。パッシブに生き、つつましく生き、善意に生きる—そうした人間のほうに、むしろより残酷な死がやってくる。いやな奴のほうに、むしろ、苦しまないで死ねる死がやってくる。そんな気がするだけでなく、たしかにそうだ……。無常などという中間色的なものではない」。(268-9頁)

まさにヨブの呪いそのままである。無常などという冷静な概念を完全に退けて、彼はただひたすら赤鬼や青鬼と形容する呪うべき痛みに堪え、死ぬしかなかった。

「死とは、ひとつの事実である。単なる一つの実事と言ってもいい。それ自身、悲しいとか、残酷だとか言うこととは本来無関係の事実だということを考える……。死は私にとって、私の死である。私の死は、私にとって悲しい事実である。しかし事実そのものには、本来、悲しいということはないのだ。そういうことを私は考える。—悲しみをまぎらわすために？事実は事実として受け入れるほかはない」。(294頁)

ひとつの納得を自らに強いながら、やはりまだ彼は、無意味な苦しみにさいなまれる。死を事実として受け入れる苦しみと、現実襲いかかる痛みの狭間で、なお心構えを持とうと必死になっている姿が痛ましい。

「今迄はどんな苦しきも、自分のこやしになった、いやそうおもうことで耐えた。しかし、今度の

苦しみは、こやしにはならぬ。唯、苦しむだけ、苦しみっぱなしで死なねばならぬ。なんとかこの苦痛を受け入れる心構えが持ちたいものだ・・・」。(309頁)

しかしこの苦しみは、最後まで彼を痛めつけた。不意にはっきり意識を戻して、

「この苦しみが何にもならないと思うと残念だ。この苦しみからはもう何も生まれない。何も生めない・・・。ただ苦しむだけでおしまいだ」(341頁)

と呟く。当人が日記を書けなくなってからは、妻が代わりに書いているが、これはその一節である。死の17日前になる。しかしその彼も、最後には、「もったいない」とか、「たくさんごめんよ」というような感謝の言葉などを呟きながら、息を引き取った。死を事実として受け入れること。今日を生きること、しかし苦痛には全く意味がないこと。それが最後まで彼を苦しめた。果たして痛みの中で、安心立命は得られたのだろうか。死を事実として受け入れることができたのだろうか。

Ⅲ：さあたまらんたまらん—正岡子規の場合—

無意味な痛み。治る痛みになら耐えることもできるが、死に至るためだけの痛みには、容易には耐えられない。死を待つだけの痛み。これは、末期がん患者に共通した不条理である。緩和ケアが飛躍的に向上してきたとは言え、いまだに無意味な痛みを苦しんでいる患者は多いだろう。インフォームドコンセントを取り入れたのはいいが、日本の知識人は多く無神論者であって、末期がんを告知されても気持ちのやり場を失うだけで、動揺の中に煩悶することもしばしばである。正岡子規は、ガンではないが、肺病と脊椎カリエスの痛みに苛まれた。同じように治る見込みのない死を待つだけの痛みであった。『仰臥漫録』(岩波文庫)には、

「余は俄かに精神が変になって来た。さあたまらんたまらん。どーしやうどうしやうと苦しがつて少し煩悶を始める。いよいよ例の如くなるかと思うと益乱れ心地になりかけたから、たまらんたまらんどうしやうどうしやうと連呼すると母は、しかたがないと静かな言葉」。(上掲書104-5頁)

と記している。痛みを共有できない人間の憤懣が到るところで爆発する。所詮親子であっても、自分の痛は分かち合えない。これほどの孤独はない。不安や痛み、苦しみは共有する者があってこそ癒されるが、醒めた理性が邪魔をする。所詮、人間は一人で死んでいかねばならない。これを支える信仰心がなければ、人間は孤独のうちに死んでいくしかない。母親や妹に、容赦のない癩癩がおとされる。この日には、自殺をしようと思うほどに心が乱れたが、その思いも、死ぬことよりも、中途半端になって苦しむ痛みの方に恐れをなして取りやめにしている。そして妙な理屈をこねる。

「逆上するから目があけられぬ。目があけられぬから、新聞が読めぬ。新聞が読めぬからただ考える。ただ考えるから死の近きを知る。死の近きを知るからそれまでに楽しみをして見たくなる。

楽しみをして見たくなるから突飛なご馳走も食うて見たくなる。突飛なご馳走も食うて見たくなるから雑用がほしくなる。雑用がほしくなるから書物でも売ろうかということになる……。いやいや書物は売りたくない。そうなると困る。困るといよいよ逆上する」。(106頁)

もっとも一方では、やはりどうにか心を収めようと必死である。『病牀六尺』(岩波文庫)では、有名な言葉が記される。

「悟りという事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思っていたのは間違いで、悟りという事は如何なる場合にも平気で生きている事であった」。(上掲書43頁)

しかしその先には、

「爰に病人あり。体痛みかつ弱りて身動き殆ど出来ず。頭脳乱れやすく、目くるめきて書籍新聞など読むに由なし。まして筆を執つてもものを書く事は到底出来得べくもあらず。而して傍らに看護の人なく談話の客なからんか。如何にして日を暮らすべきか。如何にして日を暮らすべきか。」(68頁)

「病床に寝て、身動きの出来る間は、あえて病気を辛しとも思わず、平気で寝転んでいたが、この頃のように、身動きが出来なくなつては、精神の煩悶を起こして、殆ど毎日気違ひのような苦しみをする。この苦しみを受けまいと思つて、いろいろに工夫して、あるいは動かぬ体を無理に動かしてみる。いよいよ煩悶する。頭がムシャムシャとなる。もはやたまらんので、こらえにこらえた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうこうなると駄目である。絶叫。号泣。ますます絶叫する……。誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか。誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか」。(69頁)

正岡子規の場合も、この苦しみを信仰で紛らわすことが出来なかった。彼もまた、宗教を信じない知性の人であった。画家ダヴィンチが科学者でもあったように、ものを繊細に見つめる芸術家の眼差しは、同時に科学者の眼でもあった。

「草花の一枝を枕元に置いて、それを正直に写生して居ると、造化の秘密が段々分かつて来るやうな気がする」。(141頁)

しかしこの冷酷でもある写生という科学的眼差しは逆に、家族をも自分を苦しめることになる。だから彼には、このような状態になつても、素直に手を合わせる事が出来ないのである。冷静に見る目とその目に耐えられない肉体の苦痛とが、彼に必死の形相を生む。

「しかし宗教を信ぜぬ余には宗教も何の役にも絶たない。基督教を信ぜぬ者には神の救いの手は届かない。仏教を信ぜぬ者は南無阿弥陀仏を繰り返して日を暮らすことも出来ない。あるいは画本

を見て苦痛をまぎらかしたこともある。しかし如何に面白い画本でも毎日毎日繰り返し見たのでは、十日もたたぬうちに最早陳腐になって再び苦痛をまぎらかす種にもならない……。いつ見ても同じ病苦談、聞く人には馬鹿々々しくうるさいであろうが、苦しいときには苦しいというよりほかに仕方なき凡夫の病苦談」。(69—70頁)

神に救いを求めず、仏にも手を合わさないなら、この苦しみは、ただ耐えるか、わめき散らすしかない。気分がよくなればもっと生きたいと思うし、痛ければもう死ぬ方がましだと思う。死に対する恐怖ですら痛みの余り吹っ飛んでしまう。そして彼は、1月31日の『墨汁一滴』には、希望が零になるとき、釈迦は涅槃と言ひ、イエスは救いと言ったと呟く。

「人の希望は初め漠然として大きく後漸く小さく確実になるならひなり。我病牀における希望は初めより極めて小さく、遠く歩行き得ずともよし、庭の内だに歩行き得ばといひしは四、五年前の事なり。その後一、二年を経て、歩行き得ずとも立つ事を得ば嬉しからん、と思ひしだに余りに小さき望かなと人にも言ひて笑ひしが一昨年夏よりは、立つ事は望まず坐るばかりは病の神も許されたきものぞ、などかこつほどになりぬ。しかも希望の縮小はなほここに止まらず。坐る事はともあれせめては一時間なりとも苦痛なく安らかに臥し得ば如何に嬉しからんとはきのふ今日の我希望なり。小さき望かな。最早我望もこの上は小さくなり得ぬほどの極度にまで達したり。この次の時期は希望の零となる時期なり。希望の零となる時期、釈迦はこれを涅槃といひ耶蘇はこれを救ひとやいふらん」。 (一月三十一日)

まさにこれは、痛みが強いる絶望の祈りである。死が救いとなる祈りは、神の前になく、神ともになく、ただひたすら神なしに生きることだけが残された。旺盛な食欲が生きる支えにもなっていた食に対する好奇心は、食欲とはまったくアンバランスな繊細な短歌を生んだが、苦しみがその食欲を奪う頃には、八つ当たりのとも思える女子の教育論や看護論なども展開されることになる。『病牀六尺』には、無神経な看護では、痛み苦しむ病人がたまらないと吐き捨てるように嘯かれている。

「死生の問題は大問題ではあるが、それは極単純なことであるので、一旦あきらめてしまえば直に解決されてしまう。それよりも直接に病人の苦楽に関する問題は家庭の問題である。介抱の問題である。病気が苦しくなった時または衰弱のために心細くなった時などは、看護の如何が病人の苦楽に大関係を及ぼすのである。殊にただ物淋しく心細きよの時には、傍らの者が上手に看護してくれさえすれば、即ち病人の気を抑えて巧みに慰めてくれさえすれば、病苦などは殆ど忘れてしまうのである。しかるにその看護の任に当たる者、即ち家族の子どもが看護が下手であるという、病人は腹立てたり、癩癩を起こしたり、大声で怒鳴りつけたりせねばならぬようになるので、普通の病苦の上に余計な病苦を添えるわけになる……。病人の看護と庭の掃除とどちらが急務であるかということさえ、無教養の家族にはわからぬのである。まして病人の側に坐って見た処でどうして病苦を慰めるかというくふうなどは固より出来るはずがない。何か話してもすればよいのであるが話すべき材料は何も持たぬからただ手持無沙汰で坐っている。新聞を読ま

せようとしても、振り仮名のない新聞は読めぬ。振り仮名をたよりに読ませて見ても、少し読むと全く読み飽いてしまう。殆ど物の役に立たぬ女どもである。ここにおいて始めて感じた。教育は女子に必要である」。(『病牀六尺』106-7頁)

彼には、もはや看護人の苦労は見えない。これは差し迫った病人の常かもしれない。術後は、病臥する患者と家族との喧嘩が絶えないと聞く。私も例外ではなかった。他人を思いやるなどという余裕が余りの痛みに消え去ってしまう。

「支那や朝鮮では今でも拷問をするそうだが、自分はきのう以来昼夜の別なく、五体すきなしという拷問を受けた。誠に話にならぬくるしさである」。(183頁)

これでは、子規を責めることは酷かもしれない。惨いほどに病苦は彼を苦しめた。そしてこの『病牀六尺』は、芳菲山人(本名は西松二郎)から送られた次の一句で閉じられる。

「俳病の夢みるならんほととぎす拷問などに誰がかけたか」。(185頁)

最後を看取った母は、「さあもういっぺん痛いというてお見」と言って、涙を流したと言われる。

IV：死神と睨めっこ一刑死 尾崎秀実の場合一

ゾルゲ事件のスパイ容疑で刑死となった尾崎秀実の場合はどうだろうか。時代が許せば死刑にまでは至らなかったかもしれない。彼自身も、死刑を覚悟していたとは言い切れないが、それでも確信犯としては、何らかの覚悟の上の行為であったはずである。

昭和16年10月15日早朝、上目黒の自宅から検挙された。時に40歳。獄中書簡集『愛情はふる星のごとく』は、昭和16年11月7日から始まっている。獄中生活は3年に及んだ。彼は、どのような死生観に至ったのだろうか。

気がかりな家族を残しての獄中生活だが、何よりも娘楊子には哀惜の念止み難いものがあった。

「楊子ちゃんは生まれて始めて不幸にぶつかりました。しかし世の中には不幸は実に多いのです。それに戦ってかって行かねばならんのです」。(8頁)

戦うこと、不幸が日常的なことを語りかけた。14歳の子供にどれほど伝わるだろうか。そして受験を控えた娘には、

「女学生になったらいろいろ勉強しなさい。学問は人を幸福にはしないかもしれませんが、人としてどうしても必要です」(20頁)

と、苦しい励ましを与えている。私生活では、これまでいろいろな事があっただろうが、今後と現

在の心境について、次のように書いている。

「私は政治には完全に敗れました。しかしこれからは、純粹に三人だけの家庭の人として、よき夫として、よき親として生きて行きましょう。今からそんなことをいってもおそいなどとは云わないでください。今僕の心は静かであり楽しくさえあります」。(35頁)

「私の気持ちの変化一何よりも今の静かな、しかし張りのある気持ちをどうしたら伝えることが出来るでしょうか」。(56頁)

彼の書簡には、「楽しい」「静か」「平静」という言葉がよく使われるが、いつも落ち着いて平静なわけではない。必死の思いで奈落から立ち戻ってきた末の楽しさ静けさであるにもかかわらず、彼は、誇張せず、さらっと語る場合が多い。

「私はこの頃ずっと平静な心です。不幸はただ動揺する心の暗い影に過ぎないと観じ、今では〈5字末梢〉の天地の日々の生活をそのまま人生と感じ生活しています。結局はあきらめから浮き上がってきたのではあります」。(60頁)

「去年の今頃のいら立たしい気持ちと現在の気分とを比べてみると、全く意不思議なように静かです。あらゆる問題—生命の問題すらも客観視し得るようになった—少なくともなりつつあるのではないかと思われます。これが、あきらめや敗北と結びついてのではなく、もっと深い人生観に徹したものでありたいと希っています」。(66頁)

そして

「朝から明るい空が窓の僅かな隙間からのぞいてみえます。心は若者のように弾力に充ちています」(74頁)

と、母親譲りの闊達さが何の屈託もなく綴られる。透明すぎるほどの文章である。日々の生活をそのまま受け入れることが人生だとする思いは、差し迫った者すべてに共通しているが、日々痛みに苛まれた者が、この足下にあるこの生を生きるというのとは、いくらか異なっている。高見も岸本も子規も、死を前にして、このような静かさは語らなかつた。痛みがそれをさせなかつたのだろうか。痛みほど人を陰鬱にするものはない。この痛みさえなければ、彼らもまた、あるいは秀実のように、静かさや心の弾力を語れたかもしれない。彼の静けさがどこから来るものなのかを見定める必要がある。

「いやしくも人生の道に精進する者は、昨日よりは今日と進んでいることは確かです。この意味で人生はどこまでも生きつづけてゆくべきだと思います。人生は確かに生きるに値するということにもなると思います。だが同時に人生はいつまで進んでも、向上しても、限界視野が拡がっても、

その極みというものはないので、いわば大きな観点から見れば、どこまで行っても同じことだということを知らねばならないと思います。いいかえれば、いつ人生を終わっても別に変わりはないということです。この二つの全く矛盾した如き事実を矛盾なく静かに自分の人生観の中に把持することが出来なくてはならないと思います。そうする時、人は確信に充ち、しかも不安動揺することなく人生を生き続けてゆくことが出来るのです。悟りというのはここにありと思っています」。(86頁)

人生の意味は絶えざる精進進歩にある。生きるということは確かに進歩を遂げることだが、同時に、その進歩は、無限を前にした場合には、一挙に意味を失うことも知らねばならない。自然数の無限数列も、偶数の数列に一対一に対応させることは可能であろう。無限を前にすれば、多い少ないや長短は問題にならないのかもしれない。終わりのない旅を勝手に短いと嘆いてみても無意味だ。結局は、いつ死んでも、その人生に客観的な長短はない。有限な人間と無限な時間との間に横たわる果てしないせめぎあいは、その矛盾を矛盾のままに取り込んだときに悟りが開けるというのであろうか。

昭和18年9月11日付けの書簡には、平松検事の論告が死刑であったことが記されている。

「まさかと思って一瞬はっとしましたが、直ぐに自分の直面している厳粛な現実冷静に面を向けることが出来ました」。

彼は、一瞬のためらいはあったものの、現実を冷静に受け入れた。そして

「どうしても死なねばならぬなら立派にいさぎよく死のうと思っています」(116頁)

と言い、彼もまた、いさぎよく死ぬことを望んだ。そして同年9月29日の判決で、死刑が確定した。あるいはという意識もあっただろう。友人が夫人を通じて、惻惻として人を動かす上申書を認めるようにと再三勧めた。にもかかわらず、彼にはそのような上申書を書く気はさらさらなかった。ソクラテスではないが、情に訴えてまで、裁判を有利にしようとは思わなかった。そのような意志を彼は、家族にまで求めようとしている。死刑論告後の彼の心理は、どのように変遷したのだろうか。

「僕時にこんなことを考えるのですが、まことに世にも不幸な目に突然お前たちをつき落としましたが、しかし考えようによれば、もし私が外で活動していたら、世にも頼もしい伴侶でしたらうが、お前がたたちはおんば日傘で、これからの大時代に乗りにかかることになり、しかももし万一私が病氣な何かで突然世を去ったらどんなものでしたらうか、その時こそはたとえ名誉と少しばかりの財産など残されても、狂瀾怒涛時代には何の役にも立たないでしょう。この思いがけない不幸は英子たちを否応なしに鍛え上げています。それがこれからの親子にかえがたい資産ではないでしょうか。そんなことを考えて一人なぐさめています」。(125頁)

精神を鍛え上げる時間もなく、突然病気で世を去るよりは、厳しさが予想される時代なればこそ、

この災いを転じて試練とせよというのであろう。残された親子には、つらい弁解でしかない。彼は、子規の『病牀六尺』で先の名言などを読んで感銘し、そこで厳しく批判にされていた兆民の『一年有半』なども読みたくなると、差し入れを求めている。

「菊の花二輪、親切な担当さんが折り取ってくれました。瓶に挿して眺めかつ香をかいでいます。皆がよくしてくれます。こんなところにいてさえも人々のなさはよく感ぜられます。もし鉢植えの菊の差し入れの時手に入ったら入れてください。此の頃わけても花を愛ずる気分になっています」。(132頁)

死期迫った者の感性はむき出しになって、造花の妙に言い知れぬ感動を覚える。命のあるもの全てに痛々しいまでの共感を抱くことも多い。命が愛おしくなるのだろう。彼の場合も例外ではない。そして彼は、死刑の宣告を受けて以来、絶えず死と睨めっこをしてきたと言いつつ、多少饒舌に、その睨めっこに勝ったんだと娘に呼びかけている。

「楊子さん、お父さんはこの10年ばかりも死神とかくれんぼをして来ました。そしてこの10月以来（筆者注：死刑の論告を受けて以来）は、ずっと睨めっこをして来ています。私は昔からまばたきをしないでいつまでも眼をあけているのが得意でしたので、睨めっこはなかなか強いのです。この睨めっくらは平気です。もうちっとも恐くもなんともありません。疲れもしません。分かりますか」。(152頁)

死との戦いに望んで、彼は決して逃げ隠れをしなかった。真正面から死を直視する比喻として彼は、睨めっこという動作を選んだ。彼は、そうして正々堂々とその戦いに挑んだ。気負いが感じすぎて切ないが、彼は、疲れもしないと大胆にも言つてのけた。そう言わない限り、崩れ落ちてしまうほどに憔悴していたのかもしれない。神経衰弱とも戦いながらの勝利であった。そして彼は更に、

「この頃思うことは、昔からいろんなお坊さんが死に対してのべた言葉が、妙な気張りや、負け惜しみや、わざとらしさがあるように感ぜられて来ました。私の現在の心境の方がずっと上なのではないかなどと思います。いつ来てもいつ来てみても同じこと、こちらでちょっと死んでみようかなどというのは最も下なるものです。心頭を滅却すれば火もなお涼しなどというのは、キリストが十字架の上で苦しきのあまり神をうらんだのに比べると、火熱に対する頑張りは大したものですが、やはり負け惜しみがあります。いささか我意を得ているのは、電光映（筆者注：影の間違いか）裡春風を斬るの言葉です。ただ黙々としてまんじゅうを腹一杯つめこんで平気な顔をして首を切られる土匪の頭目の無知の勇氣には私も及ぶべくも無いと思います」。

彼が、我意を得ているとして引用された漢詩は、無学祖元が元の兵士に刀を突きつけられた際に、泰然自若として唱えた偈である。その全文は「乾坤無地卓孤？喜得人空法亦空珍重大元三尺劍電光影裡斬春風」。(訳：天地の間には、一本の竹の杖を立てるところもない。天地の間には、わたしの居場所は無くなってしまった。人とは空であり、仏法もまた空であることが分かって、うれしいことだ。大元の三尺の宝剣を大切になされよ。わたしを斬

ることは、いなびかりが閃く一瞬のうちに、春風を斬るようにたやすく斬ることができるのだから)。藤平光一氏の解釈では、「天地は無限、人も法も本来空である。私は天地の氣と一体であり、空の義に徹している。あなたの剣は大そう御立派だが、私を斬ったとて、それは稲妻が、ピカピカと春風を斬った様なものよ」となる。要するに、彼は、土匪の頭目のように平気で気取らずそのまま死ぬることに理想形を見出した。しかしこのようなことは、誰しもが言葉としては語るができるものであって、要は、それをどこまで実行できるかに尽きている。理性的であればあるほど、死の不条理が煩悶となって執拗に襲ってくる。彼は、

「とにかく平静で最後の時まで日常と少しも変わらぬ気持ちと日常生活とで続けて行きたい」(166頁)

と、心を静めようとしている。堀河弁護士にゾルゲの方が腹が座っていと言われて躍起となって平静さを装うとしている姿が眼に浮かぶ。第三者の評価が真実をついていると恥じ入っているのは痛ましい。

「要するに、人は死すべきものだということを腹にしっかりと入れ、しかもその死が決して遠いものではない、何人にも極めて近いところにあるということをはっきり自覚しながら、一日一日の生を噛みしめて、充実して生きて行く態度です」。(178頁)

そして

「最後の瞬間まで少しも平常と変わることなき態度と心とで生きつづけていきたいと考えて居ります。それがどうやら出来そうな気が今はして居るのですが、お迎えが来たとき、読みかけの本をぱたりと閉じて、どうも御苦労様でしたと立ち上げられるようでありたいと思います・・・。私は絶体絶命の境に安住せんとするのであります」

と、言い切った。西行の辞世にも子規の辞世にも余裕があるが、彼にはそのような余裕は一切なく、ただひたすら絶体絶命の境に安住しようとした。彼の場合は、病死のように期限が曖昧ではなく、突如として刑が執行されるという状況にあることが、絶体絶命という言葉になったのであろう。それは結局、

「生命に対する覚悟は、実は一刹那に全生涯をこめて充実して生きることです・・・。常識的にはその日一日を充実し、力一杯、しかも楽しく生きて行く、その次の日に世を去らねばならなくなっても少しも悔いない、というのが立派な安心を得た生き方ではないかと思えます。今のお父さんはその境地にどうやら達したようです。こんなことを云っても楊子たちにはどれほどの参考にもなりますまいが、私は実にそれこそ命をかけての体験と思索から、やっとこの平凡なしかし偉大な結論を得たのです。だからきっと何かの時に思い当たることがあるでしょう。よく噛みしめてください」。(207頁)

このような悟りきった言葉とは裏腹に、彼自身は、体重が半減するほどに憔悴しきっていたと見られる。面会に来た妻が思わず漏らすほど、その体重は減っていた。自分の実際の姿を見られた後に出した手紙には、

「此の頃気のついたことですがね、私は身体よりも神経はずいぶん痛んでいることを感じています。やはり余り苦しすぎたのですね」(254頁)

と、認められた。木戸孝允も西郷もレーニンも、晩年はすべて神経が弱っていたと書かずにはおれなかった。娘らにはよく嘯みしめてみてくださいと言いながらも、彼自身の現実は、当然のことながら極めて厳しい状況にあった。彼は、禅僧のごとく、日々是好日と感じて、喜怒哀楽に左右されない悟りを求めたが、この想いは、最終的には、修証一等的悟りの境地を超えて、悠久な生命に同化することを求める宗教へと至りついたかに見える。

「この短い人生を力一杯現実に即して生きよ。それに充分の意義を認めつつ、と私はまず云うのです。併しながらそれと同時に人は常に悠久なる宇宙の生命の中に漂渺として無限に生きることを思わねばならないのです。有限、しかも須臾なる生命をもって無窮の宇宙に生きる。ここに人間の生命の特殊性があるので、人生の真意義に徹するとはこの関係をはっきり見極めるところにあるのです。いたずらに宇宙の無窮の生命に比して人生の余りにもはかなく短いことを歎ずるものは、そのままに正反対に単にこの人生の生命期間の目前のいとなみのみを追って快樂を求めて日を暮らす輩とともに、人生にはっきりした眼を開いていないあわれな人たちだと思うのです。

現実の人生を澁刺と生きつつ、しかも悠久なる宇宙の生命の裡に確乎たる生命を生きることが出来て、始めて人生を完全に生きることが出来るといえるのです。有限の身をもって無限の中に生きんと欲する。その努力と欣求一情熱となって発するところ宗教が存するのです。私かかかる意味で宗教を尚びます・・・。僕のいう宗教はあらゆる叡智の上に立ち、更にそれに即してそれを超えたところにあるのです。一有限の世界に確乎として生きるものが同時にまた無限の世界にも生きんとする場合の跳躍板の働きをなすものです」。(333頁)

彼にとり、宗教は無限への架け橋となった。有限な人生が、永遠の命に接触するところを彼も求めた。彼には、正岡子規や岸本英夫、高見順のように、生をただ生として、生に徹することができなかった。永遠を他に求めた段階で、彼は、ある意味では、生死のほかには涅槃なしとする修証一等を放棄した。皮肉なことに、筋金入りのマルキストが最後には永遠を求めた。そして漸く神経症から脱した観がある。

「今日僕は始めて人生の真意義を覚り、かくも静かにかつ楽しく日を送ることも出来るようになったのだ。もしもこの異常なる月日が無かったなら、僕は毎日ただ匆忙の裡にあくせくと日を送ってしまったことだろうと思う。僕の一生はもしも僕が別の道を行くならば、恐らくは社会的には高名、栄位を勝ち得られたことであろう。しかし人間として今日僕の立っているごとき確乎たる足場に立つことは遂に出来なかったことは明らかだ。僕は人生の意義を知り、生命の正当なある

がままの姿に徹し、社会と、親しきものへの愛情を限りなく深めるとともにまた純化することも出来た。そこにこそ我々三人のもの永遠に生きる道をも発見しえたのだと、僕はひそかに感じている」。(371-2頁)

彼は、妻と娘にも自分の掴みえた真理を理解してもらおうとしたが、それも結局は独りよがりにも終わった。

「僕はこの死んで生きている珍しい期間に何事か特別なものを掴み得て、これを人様のために残したいものと考えていろいろ努力しました……。結局は私一人が僅に安心立命の不思議な境地に到り得たにとどまったようです」(375頁)

と記さざるを得なかった。しかし彼自身には、それで充分であった。

「唯物論者ともあろうものが、宗教など口にするのも恥ずべきだなどと考えていた。だがこれは間違いだった。民衆のための阿片の作用をする宗教とは別に、信念の浄化と精神・意志の鍛錬の道としての宗教が存したのである。丁度封建時代の武士が他日主君の馬前に身命を抛つことを目的として絶えず死を念頭においてはげんだ宗教的鍛錬の方法が在ったように。少なくとも自己の道のために挺身しようとするものは、単に死を覚悟しているとか、まかりまちがえればこれは生命ものだぞなどと自覚しているくらいでは駄目なのだ。それではどうしても死生の問題が観念的になる。もっと現実的な鍛え方、覚悟が必要だったのだ」。(379-380頁)

観念的ではなく、現実的な覚悟、それを支える鍛錬としての道、それが彼の言う宗教であった。来世を信じることなく、現実を精一杯生きること、彼は、それによって永遠を手にできると考えた。そして彼の起死回生法が一つの結論として披露される。

「第一に、生命の秘義を覚り死の大事に徹見すること。第二に、これを目標として勇往邁進、不断に座禅（女は正座にてよし）三昧なること。第三、一種の呼吸法。第四は、老、仏の道で云う内観の法。つまり精神統一のための呪文の如きもの」。(384頁)

彼はこの四つの方法を実践することで、「心はつねにゆったりとたのしくなるのです」(385頁)と断言した。これが地上に残された彼のかたみなのか、実物なのかは、各自が判断するしかない。1944年7月26日付の弁護士宛の遺書には、「一切の過去を忘れよ」、「大きく眼を開いてこの時代を見よ」と、かなり得手勝手なことが書かれてある。そしておおよそ三ヵ月後の11月7日の最後の葉書には、「僕も勇を鼓して更に寒気と闘うつもりでいます」とある。真意が判然としない文章を残したまま、彼は、刑死した。

V：而今の生

四つの命の終焉を見てきた。いずれも必死に而今に生きようとした。而今に生きるとは、観念的には、生死事大という認識に立って、この世の無常迅速を感じ取ること。そして一期一会の思いで、一切は諸行無常と覚悟しながら、今という一瞬をいとおしむように生きることである。また生だけを肯定するという点では、『修証義』のように、「生死の中に仏あれば、生死なし、但生死即涅槃と心得て、生死として厭うべきもなく、涅槃として欣うべきもなし」ということにでもなるのか。これは、必ずしも特定の宗教に対する信仰を必要とするものでもないが、一般的には、このような思いや生き方は、宗教に洗脳されるか、彼らのように切羽詰らなければ、強く意識できないし、また実行することも困難である。

岸本英夫ですら、死の恐怖を払拭するために、とにかく「がむしゃらにはたらいてきた」と書き残した（上掲書34頁）。高見順は、「生きるとは今日を生きることだ」と言い放ったが、彼自身にも、結局、自分の死をひとつの事実として受け入れる覚悟はできなかった。ご馳走をたらふく食べて、悟りとは平気で生きることだと言った子規は、当然のことながら、平気でなどいることができなかった。家族に言いたい放題言い切って、去って行った。希望が完全に消失したとき、彼は、涅槃に入り、救われた。尾崎秀実は、有限の中にあつて無限を生きることを欲した。平静さと清々しさを強調する中で、永遠の命を求めた。この世には、実を隠してかたみだけを潔く残したかったのかもしれない。家族には、過去を忘れることを願って、立派な父であったことを必死に残そうとした。そしてこの筋金入りのマルキストだけが、静かに、死を迎えたかに見える。彼だけが、鍛錬としてであれ、無限の世界に生きようとしたからであろうか。

禅問答のような言葉を残した遠藤周作も、かたみも実も探しあぐねたのか、寝たきり状態になって、意識を失う死の一年前には、すでに死ぬことを望んでいたと言う。しかし彼の意志は叶えられることなく、意識のないまま、終焉を向かえた。近松門左衛門も、数多くの著作を残しながら、最後に語るべきことが何もないことに啞然とせざるを得なかった。そして辞世に、

「のこれとはおもふもおろか うづみ火のけぬま あだなるくち木がきして」

と詠った。

しかし四つの命は、いずれも最終的には、安らぎを得られなかった。私はそう考えている。それは、生だけがあるとする理屈にも、それを支えるような荘子の万物斉同の理屈にも、不十分さがあるためである。現在の瞬間を大切に生きるとは、自力解脱を求めても、他力救済を求めても、本当の意味で、それを実現することは困難である。自力解脱には、思い上がりがあるし、他力救済には、自己がない。自己を保ちながらも、思い上がりを捨てる必要がある。

一瞬一瞬を掛け替えのない時間として生きるには、ただ漠然と、必死に生きるのだと覚悟を決めても、所詮、そのような覚悟は時間と共に薄らいでしまうのが現実である。また観念的な生死事大、無常迅速という思いも、結局は、持続した緊迫感を生み出すことはできない。そこには、根拠となる思想がないからである。その思想の一つが、一つ一つの振舞いが、永遠に残るという考え方である。一瞬一瞬の振舞いが永遠に残されるという思いが、生に本当の意味での緊張感を与える。これ

は、手を合わせて弥陀の懐の中に安らうことでは決してない。この意味では確かに生きるとは、どこまでも自力でなければならない。しかし誰が、我々の生きた事実を永遠に記憶するのだろうか。子どもや子孫の記憶では、永遠に残ることはない。記憶が永遠に残るためには、やはり永遠なる存在が必要であろう。それは、神であっても弥陀であっても、観音菩薩であっても、大いなる命であっても、何であってもいい。とにかく永遠なる存在が永遠に記憶するという事実だけが、重要なのである。

私は、永遠に記憶するような存在を信じたい。もちろんすべての人々がこれを信じる必要はない。死後にも魂は不滅なのだと思える者、復活できると信じる者、子どもたちが覚えてくれると、はかない記憶に安らぎを求め、名を残すことにこだわる者、先に物故した人々に会えることを楽しみにしている者、そのような者がいても何ら差し支えない。しかし私には、先の4つの生に本当の意味での安らぎを見出さなかったように、このどれもが、合理的なこととは思えない。

私には、死後には肉体はもちろん、精神や魂も存在しなくなるとしか考えられないし、子どもや子孫が記憶してくれることにも心の安らぎを得ることはできない。ましてや名を残すなどとは思ってもみない。このような考え方を維持しながら、なおかつ一切が消滅してしまうという恐怖心は払拭したい。この両方を実現する一つの解決策が、生きてきた人生は、神や弥陀によって永遠に記憶されるとする考え方である。これは、決して死後の生に永遠の命を与えるものではない。むしろ、この世の生に、永遠の意味を与えるだけである。

私が、「服膺する弥陀」を主張するのは、このような思いからである。「服膺する」とは、すべてを完全に記憶するという意味である。そのような弥陀や神の存在によって、真に生きとし生けるものがすべてその中に包み込まれる。包み込まれるとは、端的に言えば、記憶されることに他ならない。子どもを失った親たちが、子どもの死を生涯忘れないように、同じような思いで、しかと記憶に留めるもの、それが、服膺する弥陀なのである。これによって、生まれてすぐ亡くなってしまった赤子から、認知症の老人の死の全てに、また自ら祈ることを知らず、自ら祈ることも出来なくなった人々の全てに、永遠の命が与えられる。弥陀や神が大切に、かつ永遠に、それらの生涯を記憶する。そのような存在を信じることができれば、これほど、合理的な考え方はない。

この弥陀には、既に済んでしまった過去の一切をくまなく記憶する能力はあるが、将来を見通す力はない。見通せないからこそ、悪や災害にも無力なのである。また無力だからこそ、人間に真なる意味での自由と責任が与えられる。明日の決断は、人間だけが責任を持つてする以外にはない。生きるとは、そういうことでなければならない。このことは、どこまでも自力の生でしか実現できない。しかしこの弥陀の無力は、完璧に記憶する能力によって十分に償われる。既に済んでしまった過去の一切が、弥陀の記憶の中に残される。弥陀は、被造物の痛みを共に痛み、被造物の喜びを共に喜ぶ。悲喜こもごもの被造物の行動や思いが常に新たなものである限り、それは、立派な創造行為であって、この創造行為が、弥陀に影響を与えることになる。その意味では、弥陀も、我々と共に永遠に成長を続ける。なぜなら新たな被造物が生まれるたびに、弥陀の記憶の中には新たな記憶が残され続けることになるからである。

而今に生きるとは、結局、弥陀の記憶内容を少しでも良いものにすると言ってよいかもしれない。永遠に記憶されるという思いが、生きることに緊張感と責任感を与える。そしてこの緊張感と責任感が一瞬を大切に生きることを痛切に感じさせるのである。残される記憶なら、少しでも良

いものにしたい、と誰もが願わざるをえなくなる。この思いの痛切さは、ただ「現在という瞬間を精一杯生きる」とか一期一会とか言ってみたとこで、到底、抱けるものではない。既に述べたように、このような感情には、確かに切羽詰った思いはあっても、根拠となる思想がないからである。4つの命に欠けていたものも、この根拠となる思想であった。たんなる言葉のまやかしでは、決して而今に生きることはできない。

私は、このような思想をアメリカのプロセス神学から学んだが、これを仏教に適用して、弥陀の誓願および四弘誓願の一つに加えたいと考えている。法蔵菩薩の第四十九願として追加する内容は、以下のように表現される。

「世尊よ、もしも、わたくしがこの上ない正しい覺りを現に覺った後に、このわたくしの仏国土において、一人でも弥陀に服膺されないものがあるようであつたら、その間はわたしは、この上ない正しい覺りを現に覺ることがありませんように」。

四弘誓願には次の一つを加えたい。

衆生無邊誓願膺^{よう}（数限りない一切の衆生を服膺、記憶する願）

私は、このような「服膺する弥陀」の存在を信じて、生きてみたい。そして掛け替えのない死に臨もうと思っている。死によって何もかもが消えてしまうわけではない。死は消滅ではなく、終わりにすぎない。小説に終わりがあるように、人生にも確かに終わりはある。しかしそれは、何も残らないという意味での終わりではない。生きてきた人生は、決して消えてなくなることはない。小説は、読み終わっても、その中身は、記憶に残される。ならば、できれば、弥陀にはいい小説を読ませて、素晴らしい読後感を味わってもらいたい。ただそれだけが、人生を生きる意味である。

注1) 大意は以下の通り。

私は武門の家に生まれながら、武門を離れて三槐九卿（宰相や公家ら高位の人のこと。公卿ら）に、咫尺し（ごく身近に仕え）たが、自分には寸爵（なんの爵位）もない。庶民の中で暮らしても商売しらず、隠者のようで隠者でなく、賢者のようで賢者でなく、物知りのようで何も知らぬ、世のまやかし者である。唐や大和の教えになる道理や、芸能・雑芸・笑い話の類まで、何でも知らぬことがない風をして、口から出任せ、筆の走るままにしゃべり散らしてきた。いまわの際になって、他人に伝えたり、自分が思う真の一大事は、一言半句もなくて当惑し、心中ひそかに恥じ入っている。七十余年の歳月を顧みると、思えばとりとめない一生を過ごしたものだ。（廣田隼夫訳）